

<b>4-8</b>					
主題	特別養護老人ホームにおける介護度の上昇に伴う 入院数と低栄養の増加に関する研究				
副題	MNA <sup>®</sup> -SF は有害事象の抑制に有効か				
キーワード 1	特別養護老人ホーム	キーワード 2	MNA <sup>®</sup> -SF	研究(実践)期間	36 ヶ月

法人名・事業所名	社福) 愛寿会 特別養護老人ホーム紫磨園			
発表者(職種)	小浦梓(管理栄養士)			
共同研究(実践)者	なし			

電 話	03-3857-4165	F A X	03-3857-8425	
-----	--------------	-------	--------------	--

事業所紹介	当施設は、東京都足立区に位置し、創立から30周年を迎えた従来型特養(特養120床・短期入所10床)です。在宅サービスセンターと居宅介護支援センターを併設し、地域から頼られる施設づくりに“オール紫磨園”体制で取り組んでいます。			
-------	--	--	--	--

### 《1. 研究(実践)前の状況と課題》

平成27年4月の特別養護老人ホーム(以下、特養と略す)入所指針の改正以降、介護度の上昇に伴って入院数は増加した(平成27年度1日平均2.6人⇒平成29年度6.5人)。入院による空きベッドを短期入所に充て、昨年度の短期入所稼働率は190.1%であったが、特養・短期入所合算の稼働率は95.9%と厳しい現状であった。さらに、短期入所の入退所に関わる業務量の増大で、関係部署の負担は大きくなった。

高齢者における栄養アセスメントの意義は、先行研究などからも明らかである<sup>1)</sup>が、特養入所者における報告は十分ではない。当施設においても、平成27年4月～平成29年3月に実施した栄養ケアマネジメントから、介護度の上昇と栄養状態には強い負の相関が認められ、特養における栄養ケアマネジメントはさらに重役を担うこととなっている。

### 《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

特養入所者の栄養ケアマネジメントは、従来の栄養スクリーニングに加え、Mini Nutritional Assessment-Short Form(以下、MNA<sup>®</sup>-SFと略す)を活用している。MNA<sup>®</sup>-SFは、高齢者における近未来の有害事象発生確率をかなり正しく予測でき、しかもその予測ツールが、採血データを必要としない、わずか6項目で構成されていることから簡便であり、多くの在宅・医療機関・福祉施設で使用されている栄養アセスメントツールである。

MNA<sup>®</sup>-SFの活用は、有害事象発生の抑制につながるかという仮説のもと、両者の関係性を分析し、低栄養状態の早期発見、早期介入の機序とすることを目的に研究を行った。

### 《3. 具体的な取り組みの内容》

期間：平成27年4月～29年3月 対象者：特養入所者

- I. 月別 MNA<sup>®</sup>-SF スコアの平均推移と、先行研究<sup>2)</sup>を参考に、生存率を調査。
- II. 平均介護度と MNA<sup>®</sup>-SF スコアの相関分析。
- III. MNA<sup>®</sup>-SF スコアと入院数の相関分析。
- IV. 有害事象（主に入院）が発生した利用者（延べ95名）の過去の MNA<sup>®</sup>-SF スコアの推移について、個別で調査。

### 《4. 取り組みの結果》

- I. MNA<sup>®</sup>-SF スコアは、栄養状態良好群が減少、低栄養群が増加している傾向にあった。平成27年4月1日から3年後の生存率は、栄養状態良好群49%、At risk 群40%、低栄養群23%であった。
- II. 平均介護度の上昇と MNA<sup>®</sup>-SF スコアには、強い負の相関（相関係数 -0.93）が認められた。
- III. MNA<sup>®</sup>-SF スコアと入院数には、弱い負の相関がみられた。（相関係数 -0.46）
- IV. 有害事象が発生する以前、直近の MNA<sup>®</sup>-SF スコアの内訳は、栄養状態良好群16名、At risk 群66名、低栄養群13名であり、それ以前のスコア推移に傾向はみられなかった。

### 《5. 考察、まとめ》

MNA<sup>®</sup>-SF は、特養入所者における近未来の有害事象発生の予測に有効であるが、入院はどの栄養状態からも発生しているため、特異性に欠ける。特養入所者の有害事象は、栄養スクリーニングの介入頻度よりも早い周期で発生している可能性があるため、抑制のためには早期発見と早期介入が必要と考えられる。それには、多職種連携が必要不可欠であり、利用者のちょっとした変化にも気をとめ、今後起こりうる有害事象抑制のための検討を行う必要があると考える。

1事業所での研究であり、母数が少ないことが結果に影響した可能性もある。今後、各地で研究がすすむことを期待したい。

### 《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

### 《7. 参考文献》

- 1) 高齢者の栄養スクリーニングツール MNA ガイドブック 雨海照祥 医歯薬出版
- 2) Kagansky N, Berner Y, Koren-Morag N, et al. Poor nutritional habits are predictors of poor outcome in very old hospitalized patients. Am J Clin Nutr 2005 ; 82(4) : 784-91

### 《8. 提案と発信》

特養における栄養ケアの目的は、栄養管理や栄養改善そのものではなく、その先にある利用者の QOL 向上や家族の幸せのためである。ケアプラン作成時には多職種とともに、それらの点に十分配慮することをこれからも心がけていきたい。